

創刊に寄せて

株式会社 エフピーアイランド
代表取締役 嶋 敬介



月刊『FP生活』の創刊、おめでとうございます。

ついに「FP」の名を冠した月刊誌が市販されると聞き、私自身も感激すると同時に隔世の感をさえ覚えます。長らくFP (ファイナンシャル・プランナー) とカッコ書きで表記されていた活字から、FPの文字が漸く一人歩きできる世の中がやってきた証としての『FP生活』の創刊を心より喜ぶと同時に、私もFPの一人として身の引き締まる思いです。しかし逆に言うと、金融機関やその関係者、マネー雑誌の読者等、一部の興味ある方々を除いてはFPと言ってもどうもピンとこないというのが実情であった時代から、金融生活情報を知らずして「賢

く」生活していくことができ難い、言わば暮らし難い世の中(良いも悪いも自己責任の時代)へ突入したと言えるのではないでしょうか。この誌面を手にとってお読みの読者諸兄もまさしくその一人なのであり、その行動が正解であったことはこの本の発行部数が証明してくれることになるだろうと確信しています。

年金問題に端を発したサードエイジに対する意識の高まりは、長寿社会・医療制度・介護・痴呆・贈与・相続……と、様々な問題に対する解決策の模索へと繋がっては来たものの、その情報提供には未だ至っていないのが現実ではないでしょうか。だからといって今日のような混沌とした先行き不透明な世の中にあつて、果たして将来の生活設計を考える必要性があるのか、と言う疑問をもたれる向きがあるかも知れません。しかし、だからこそ今、FPが必要とされるのです。FPはよく「家計のホームドクター」とも称されていますが、医療でも昨今は予防医学が重視されているがごとく、考え得る将来のリスクに対する、まさしく

「予防」を行うことこそが重要なのです。

金融商品の種類や内容から相続対策に至るまで、情報の点と点を線で結ぶ役割を担うのがFPなのです。同一の金融商品や対策であっても、その判断時点や家族状況によって選択肢は全く異なってきますし、通常家族間では言い出し難いことであってもFPを仲介にして話し合えたり、資産や情報を一括管理することによって「いざ」という緊急時にはFPにさえ連絡を取れば……、ということも考えられます。日々の生活から将来の問題点まで、換言すると「ゆりかごから墓場まで」ではなく「ゆりかごから次世代のゆりかごへ」と、連続と続いていく関係こそがFPの存在なのです。

「知っていると得。知らないと損！」

自己責任の時代だからこそ必要とされる真の情報の本誌でキャッチアップし、新時代の生活設計のために上手にFPを活用して頂きたいと願っています。

＊輝ける未来のために。